



アメリカ南部訪問 ～ W. R. ランバスに見守られて ～

池田 裕子(学院史編纂室)

関西学院創立125周年を記念し、同窓会による「創立者W. R. ランバス博士の足跡を巡る旅～アメリカ南部編～」(10月2日～9日、団長:辰馬勝同窓会副会長)が実施されました。昨年のブラジル編には商学部の平松一夫先生、国際学部の鷺尾友春先生、校友課の藤澤快さんを含む20名が参加され、その様子は同窓会常任理事・企画委員長の多田義治さんにより、『母校通信』だけでなく、広報誌『K. G. TODAY』第273号でも紹介されました。2年目の今年は、ルース・グルーベール院長を含む総勢33名がアメリカ南部(ミシシッピ州ジャクソン、テネシー州ナッシュビル)を訪ねました。来年は、「上海・蘇州編」として、ランバスの誕生日(11月10日)に生誕地を訪ねることになっているそうです。

私は、アメリカ南部の訪問先との交渉を同窓会から頼まれたこともあり、このツアーに一部同行する形で9月29日から10月12日までアメリカを訪問しました。ランバスだけでなく、J. C. C.ニュートン第3代院長やW. B. パルモア等の調査も含めた欲張りな旅となりましたが、ここでは、ミシシッピ州とテネシー州訪問時の模様をその事前準備を交えてご紹介したいと思います。



1. ミシシッピ州ジャクソンー人歩き

ジャクソン訪問は2度目でした。前回は9年前、創立者の生誕150年を記念して、山内一郎理事長、畑道也院長、平松一夫学長等がパールリバー教会(Pearl River Church)を訪問されるのに同行しました。その時、ジャクソンに2泊しましたが、前夜メンフィスからジャクソン入りし、教会訪問の翌朝サウスカロライナ州に出発したため、街を見る余裕はありませんでした。今回は、同窓会ツアーと合流する前日昼過ぎに到着し、ダウンタウンに3泊したので、初めて街を歩くことができました。

10月1日、ノースカロライナ州アッシュビルからアトランタに飛び、ジャクソン行きの小型機に乗り換えました。空



港ではミルサプス大学アーカイブズ(J. B. Cain Archives, Millsaps College)のデブラ(Debra McIntosh)さん【写真左】が出迎えてくださいました。「私は身長が180cm近くあります。でも、ミシシッピ州の女性としては、特別長身というわけではありません」。前もってそうお聞きしていましたが、実際にお目にかかると、背の高さより輝くような笑顔が印象的な女性でした。9年前にはメールのやりとりだけで実際にはお会いできなかったのが、「やっと会えたわね!」と喜び合いました。デブラさんは、私が昼食をすませていないことを確認すると、在宅勤務のご主人を呼び出し、レストランでご馳走してくださいました。

昼食後、ミルサプス大学に向かい、3時間ほどランバス関係資料を拝見しました。神戸で撮影されたウォルター一家の写真や成人後のウォルターの長男の写真など、関西学院にとって貴重な資料が目にとまりました。デブラさんは、詳細不明の、しかしランバス家と関係があると思われる古い資料を取り出すと、私に意見を求められました。二人の知識を総動員してあれこれ推測し、意見交換するのは、楽しく、また得難いひと時でした。

あっという間に午後5時になってしまいました。デブラさんにホテルまで送っていただき、チェックインを済ませ一休みしていると電話が鳴りました。ランバス・ファミリーのご子孫ドン(Donald Messersmith)さんからでした。ドンさんは、ランバス生誕150年記念行事出席のためご夫婦で来日されました。昨秋、奥様のシェリーさん(Margarita Park Sherertz Messersmith、ウォルターの妹の孫)を亡くされたことは前号に書いた通りです。今年のランバス・デイに出席するので、同窓会ツアーの宿泊先を教えて欲しいとの連絡を受けていました。ドンさんは、前日到着された

そうです。シアトルからいらした甥のビル(Bill Sherertz)さんも交えて、夕食を一緒にとのお誘いを受けました。

7時半に1階ロビーでお二人にお目にかかり、ホテル内のレストランでご馳走になりました。ビルさんは歴史に深い関心をお持ちで、一族のアーキビスト的存在だそうです。お二人とは、翌朝も一緒しました。話が尽きなくて、2時間もの長い朝食となりました。

そうしたわけで、10月2日の活動開始は午前11時過ぎになってしまいました。まず目の前のユニオン・ステーションに向かいました。アムトラックとグレイハウンドバスの駅は閑散としていました。周囲は工事中で、メイン・ストリートにもほとんど人影がありません。私が泊まったホテルは、かつては「キング・エドワード・ホテル」という厳めしい名前だったそうです。周囲が賑わっていた頃の古き良き時代の写真がロビーに飾られていました。

それでも、治安が悪いようには感じられなかったので、旧議事堂(Old Capitol)までメイン・ストリートを歩いてみることにしました。たまにすれ違う人は、私に笑顔を返してくれました。ジャクソンに何の用で来たのかと尋ねる人もいました。「明日、パールリバー教会で開催されるランバス・デイに出席するため、日本から参りました。私の学校は関西学院と言って、1889年にW. R. ランバスによって創立されたのです」。そうお答えすると、「ランバス？ 聞いたことのある名だ」と言われました。

旧議事堂は現在、博物館になっています【写真右】。中に入ると、受付の女性ルース(Ruth P. Cole)さんから質問攻めにあいました。自己紹介を兼ね一通り説明すると、「ランバス・デイに出席するため、はるばる日本から？ 何て素晴らしいことでしょう。それなら、私の教会にもぜひ立ち寄ってください。ギャロウェイ記念教会(Galloway Memorial United Methodist Church)と言うの。歩いてすぐよ。教会の前にはギャロウェイ監督(Bishop C. B. Galloway) が住んでいた家も残っています。あなたのことを教会に電話しておくわ。その前に、ここでギャロウェイ監督の肖像画を見て行ってね」と言われました。



ギャロウェイ監督は何度か来日しています。1894年(関西学院)、1902年(神戸)、1904年(神戸)に開催された南メソヂスト監督教会日本宣教部年会で議長を務めました。原田の森のブランチ・メモリアル・チャペルの献堂式にも出席しています。

午後1時半、旧議事堂を出て教会【写真左】に向かいました。ギャロウェイ監督の旧宅にカメラを向けていると車が止まりました。驚いたことにルースさんです。「教会に電話しておいたけど、やっぱり私のご案内するわ」。

ご親切なルースさんに連れられ教会の庭に入ると、一對の立派な石灯籠【写真右】が目にとまりました。「日本の灯籠ですね。どうしてここに？」



とお尋ねすると、「え？ 日本のものなの？ ずっと前から教会にあるわ」と言われました。後日知ったのですが、この灯籠は、お世話になったお礼に日本からギャロウェイ監督に贈られたものでした。

教会内部では美しいステンドグラスに見とれました。「このあとは、新しい議事堂を見に行くといいわ。中の見学もできるし、素晴らしい建物だから絶対に見逃さないで」と、ルースさんからさらなるアドバイスを頂戴しました。

近くの店で遅い昼食をとったあと、現役の州議事堂(Mississippi State Capitol)【写真左】に向かいました。入口の

警備員の指示に従い奥の受付に行くと、ジャクソン訪問の目的を尋ねられました。朝から何度も説明したランバス・デイのこと、関西学院との関係をお話すると、大変喜ばれて「今は会期中でないから、どこでも入れます。私のご案内しましょう」と言われました。議事堂の重厚ながら繊細さと温もりを感じさせるインテリアに気後れする思いで足を進めました。「あなたのジャクソン来訪の目的をこの人にも聞かせてあげて」と頼まれ、他の職員にも自己紹介しました。

創立者の名を口にしたおかげで、ジャクソンの一人歩きが充実したものになりました。「ランバス」はまさに魔法の一言です。



2. ミルサプス大学公式訪問とランバス・デイ

10月3日午前9時半、同窓会ツアーの皆さん(日本からダラス経由で前日午後ジャクソンに到着)と一緒にバスでホテルを出発しました。ランバス・ファミリーのアーキビストを自認するビルさんも私たちのバスに同乗されました。10月第一木曜日は、ランバス家の母教会であるパールリバー教会でランバス家4代にわたる働きを記念する礼拝が行われます。今年の同窓会ツアーは、この日に照準を合わせて企画されたのです。



午前中、ミルサプス大学図書館で歓迎を受けました。デブラさんが私たちのためにランバス関係資料を展示してくださっていました。飲み物やフルーツ、アメリカ南部のお菓子も用意され、リラックスした雰囲気の中、デブラさんから大学の説明をお聞きました。学生数1,000人程の小さな学校で、平均クラスサイズは14人。学生は寮生活が基本だそうです。関西学院創立者は、このような学校をつくりたかったのかもしれませんが。その後、学生がキャンパスを案内してくれました。創立者(Reuben Webster Millsaps)の墓がキャンパスにあることを知りました。11時半にバスに戻ると、デブラさんから参加者一人一人に訪問の記念品が手渡されました。パールリバー教会での再会を約束して、大学を後にしました。

これから昼食をとり、その後いよいよランバス・デイ出席のためパールリバー教会に向かいます。この教会は1973年に教会としての役割を終え、現在は史跡になっています。ですから、私はランバス・デイを企画・実施している歴史委員会(Pearl River Church Historic Council)のエルバート(Elbert Hilliard)さんに連絡し、交渉を続けてきました。礼拝は午後2時半からですが、30分前に教会に到着し、ランバス家の墓地を見学するよう勧められました。そのためには、ジャクソン市内のレストランを午後1時に出発する必要があります。市内から教会まで通常車で45分かかるからです。エルバートさんは私へのメールの中で、何度も時間のことを念押しされました。それでもなお心配だったようです。最終的に、教会までパトカーが先導するよう警察に要請したとの連絡を受けました。

レストランで食事を終えた私たちを1台のパトカーと3台のバイクが待ち受けていました。警察の先導【写真右】という特別待遇に一番興奮しておられたのは、アメリカ人であるグルーベル院長だったかもしれません。教会までの移動は大変スムーズでした。信号を気にする必要がないので、20分で到着してしまったのです。その頃には、午前中の曇り空がすっかり快晴になっていました。



エルバートさん【写真左】は既に準備を整え、私たちの到着を待ち構えておられました。教会裏手の墓地に案内し、ランバス家の墓石を一つ一つ丁寧に説明してくださいました(その様子が地元紙にカラー写真入りで紹介されました。エルバートさんの横に私が大きく写っているのは、泣く泣く通訳をさせられているからです。また、記者からインタビューも受けました)。

礼拝は午後2時35分に始まりました。小さな教会に入りきれないほどの出席者です。中央最前列に、遠方から来られたランバス・ファミリーの子孫の方々の姿が見えました【写真右はドンさん】。私の隣にはミルサプス大学の宗教主事(Rev. Chris Donald)が座られました。建物の外にテントが張られ、椅子が置かれていました。遠来の私たちを中に入れ、地元の方々は外に座られたのです。前もって、歌われる讃美歌のタイトルをお聞きしておいたので、私たちは日本語で歌うことができました。関西学院を代表してグルーベル院長がランバス・デイに参列できた喜びと感動と感謝を語られました。スワンソン監督(Bishop James E. Swanson, Sr.)も、力のこもった挨拶をされました。私たちが送り出したのはたった二人だった、それがこんなに大きくなって帰ってきた、という言葉が印象に残りました。最後に、ビッグ・サプライズが用意されていました。教会近くにはウォルターの祖父ジョン・ラッセル・ランバスの家がありました。南北戦争中、ウォルターも両親と共に過ごしたと考えられる家です。その家で使われていた木材を使って作られた十字架がスワンソン監督とグルーベル院長に贈られたのです【写真左】。





1時間の礼拝が終わって外に出ると、飲み物と軽食が用意されていました【写真左中央の日本人は元関学職員の鈴木千恵子さん】。同窓会ツアー女性陣からの感謝の気持ちとして、折り紙で作った箱が地元の方々に配られました。私は、9年前にお目にかかったジェーン(Jane Coign)さん、ブルース(Bruce Lambuth)さんご夫妻と再会を喜びました。90歳を超えられたジェーンさんは、9年前に差し上げた関西学院のマーク入り紙袋を宝物のようにお持ちでした。当時お世話になったミルサプス大学前宗教主事のフォーテンベリー(Don Fortenberry)先生、ケイ(Kay Barksdale)さん、トム(Tom Henderson)さん、サム(Sam Price)さんとも旧交を温めました。今回、ご親戚の結婚式と重なり参加できなかったジョン・ルイス(John Lewis)さんご夫妻との再会が叶わなかったのは残念なことでした。

テレビカメラの前でインタビューを受けたり、出席者と話をしたり、声をかけたり、写真を撮ったり、てんてこ舞いの内に時間が過ぎ、時計を見るともう4時半です。バスが出発します。エルバートさんを探し出し、言葉で言い尽くせぬ感謝の思いを告げ、お別れの挨拶をすると、「もう行ってしまうのか。涙が出そうだ」とおっしゃいました。その気持ちは私も同じでした。

3. ヴァンダビルト大学キャンパスツアー

10月4日早朝にホテルをチェックアウトし、ジャクソンからナッシュビルに移動しました。ジャクソンからの便が小型機だったため2便に分かれ、しかもダラス経由という悪条件でしたが、定刻より早くナッシュビルに到着し、ホッとしました。午後4時から創立者の母校ヴァンダビルト大学(Vanderbilt University)で特別なキャンパスツアーをお願いしていたので、遅れるわけにはいかなかったのです。ランバスはここに1875年から77年まで在籍し、医学と神学を修めました。ホームカミング・ウィークエンドを迎える金曜日の夕刻という、大学側にとっては悲鳴をあげたくなるタイミングだったと思われるのですが、ライル(Lyle Lankford)さんによる素晴らしいツアーが用意されていました。その様子は同大学ウェブサイトにも掲載されています。

ツアーはランバスが使っていた校舎(Kirkland Hall)前から始まりました。当時の写真やイラストをコピーした資料(11枚)が参加者全員に配られ、ランバスが経験したであろう様子を再現する説明がなされました。参加者の希望を組み込んだこのようなツアーを提供する仕組みが関西学院にあるでしょうか？説明の合間に、「私は関西学院

の学院史編纂室で働いています」と声をかけると、「これらの資料は全てアーカイブズで集めたものです」とおっしゃいました。

キャンパスツアーの手配をお願いした国際部のジュリア(Julia Kathryn Hodge)さんにはお会いできませんでしたが、代わりにスージー(Suzy Yuangi Wang)さんが挨拶に来られ、参加者全員にボールペンをくださいました。創立時には一本の木もなかったというキャンパスは緑に包まれ、卒業生を迎えるため、スクールカラーの黒とゴールドで美しく飾られていました。



ツアー終了後、空港にも顔を見せてくださったアメリカ合同メソジスト教会高等教育宣教局のケン山田さんが私たちのバスに乗り込まれました。そして、周囲の建物を車窓からご案内くださいました。

4. ウッドバイン教会

ランバスがヴァンダビルト大学在学中に初代牧師を務めたウッドバイン教会(Woodbine United Methodist Church)とは、事前になかなか連絡が取れず、苦労しました。手紙を出しても、メールを送っても返事がないのです。そこで、電話をかけることにしました。そのためには、夜中に起きていなければなりません。留守番電話にメッセージを残しましたが、連絡がなく、やっと電話が通じたのは午前6時(現地時間午後4時)でした。電話に出られた教会員グレンダ(Glenda)さんに次の確認をしました。

「日本から電話をかけています。私はW. R. ランバスが神戸に創立した関西学院の学院史編纂室で働く池田裕子と申します。そちらは、ランバスが学生時代に初代牧師を務めた教会ですか？」

「はい、初代牧師はW. R. ランバスでした」

「その名前が入った美しいステンドグラスがあると聞いていますが、今もありますか？」

「はい、名前入りのステンドグラスが確かにあります」

間違いないことがわかったので、創立125周年を記念して同窓会が創立者ゆかりの地を訪ねるツアーを企画していることを説明しました。ナッシュビルも訪問するので、教会内部を見学させて欲しいと思い、何度も手紙やメールを送ったけれど、返事がないので気を揉んでいると話しました。

「日本からいらっしゃるのですか？ それは素晴らしいことです。私としてはもちろん大歓迎です。牧師(Kenneth R. Edmondson)に確認して返事をしてもらいます」と言われました。しかし、その後も音沙汰がなかったので、ミルサプス大学のデブラさんをお願いして、プッシュしていただきました。

その結果、10月5日午前10時に待っている、との牧師の言葉と携帯電話の番号が送られてきました。しかし、当日、約束の時間になっても教会の扉は固く閉ざされたままでした。肝心の電話も通じませんでした。

途方に暮れていると、教会裏に1台の車がとまりました。降りて来た女性に事情を話し、牧師に連絡を取っていただきました。女性は教会の別棟で行われるダンス教室にお子さんを連れて来られたそうです。別棟の鍵しか持っていないとのことでしたが、電話に出た牧師の指示があったようで、教会の鍵を開け、中に入れてくださいました。

慌てて駆けつけられた牧師はいかにも人の良さそうな方で、「10日だと思ひ込んでいたよ」とおっしゃいました。監督にも声をかけ、婦人部による歓迎の手はずも整えておられたそうです。ランバスについても既に調べておられました。私たちが辞去する時には、一人ずつ手を握り温かく送り出してくださいました【写真下】。

9年前に泥棒が侵入した際割られたランバスの名前入りステンドグラスが美しく修復されているのを確認し(当時、教会を訪問された法学部の鮎川潤先生を通して事情を知った関西学院は修復費用の名目で献金しています)、ランバスの時代の教会が描かれた絵【写真上】を拝見して、牧師にもお会いできたのですから、私たちの目的は十分達成されたと言えるでしょう。



写真の一部(3頁右の3点、5頁下左1点)は、山崎往夫さんにご提供いただきました。ご協力、ありがとうございました。